

摂田屋辻・詳細資料（長岡と摂田屋の補足資料）

MfG_J_Setayatsuji_detail_sample.pdf

1. ここから東山、鋸山が正面に見える。

(1) 2004年の中越地震で、全体70cm隆起、南の大峰山の山頂の一等三角点では、南北に1m移動。 宮内地区一帯は、20cm隆起。

地震前の、JR東日本、3,000本橋脚の愚直な保守ストーリー

(2) 東山は、明治20年代から大正（1890-）にかけ、長岡の西山とともに、日本最大の石油産出。今も、信濃川左岸の関原～越路原は、天然ガスの日本最大産出量(国内消費の2日分)

～ これらは、みな、東山エリアがフォッサマグナ東端に原因。

(3) 左の奥が山古志。 錦鯉と闘牛。

錦鯉復活のストーリー。

(4) 長岡の信濃川右岸を潤す4つの河川の源流地帯。

4つの河川を、福島江、東大新江がサイフォンで横切り、江戸時代の上組、北組の米作を支えた。

2. ここは、その昔、摂田屋村の入口。

摂田屋は、村松方面にあった大寺院、修験の聖地への旅人への接待屋として発展。江戸期には、蔵王の安禅寺の寺領(蔵王神社の別当寺、幕府徳川家菩提寺・寛永寺の末寺)と、長岡藩領が、モザイク状になったところで、寺領の接待屋村、藩領の摂田屋村という名の地域が混在。

3. 摂田屋は、かつて物流の要衝

太田川を使って、信濃川本流、更に地藏堂で西川経由、新潟湊へ。

信濃川から中之口で五十嵐川経由、栃尾方面。

信濃川から上流、十日町。渋海川、魚野川経由で、魚沼全域。

三国街道、山の道を通して、上沼、そして関東、江戸へ。

4. 摂田屋は、戊辰開戦の前島神社に近く、長岡藩本陣・光福寺がある。なぜ長岡藩が戊辰の役に深く関与したのか、ここで話すのが一番。

年表まとめ、及び、下記のトピックス。

(1) 北海道に派遣

1807 牧野忠精、独自に各藩の対応探究などに藩士2名を東北、北海道に派遣（長岡市史双書55_奥羽行_旅の目的と背景）

凡例

一 密かに藩中の命を奉り、遠く北辺を探るの役、不屑の僕等誠に其恐れなきにあらず、・・・

本文冒頭の「凡例」には、この旅の目的が書かれている。
それは、藩命により密かに「遠く北辺を探る」ことであった。
旅日記は、後に藩命により北地に入る人の道しるべとして
藩中の役を助けんと願い、筆をとる、とある。

長岡藩出費増をまねき、1850年代の第一次財政改革。
吉田の今井家、亀倉家などの豪商、大庄屋の支援。
さらに幕末の、河井継之助も関与した、第一次財政改革。

(2) ホイートン『万国公法』の影響

藩校崇徳館、阪之上小に伝わる「万国公法」復刻本に、
「論戦時局外之権」の言葉がある。～阪之上小・伝統館でも、この頁を展示
局外中立の権利、局外中立による生き残りの可能性を知り、
高田での西軍による三万両差出し命令に対し、「朝廷に敵意はなく、
また会津にもいささかの含みもない」とした発想のもと。

～ 長岡に、最新の海外事情が入ってきていた。なのに、・・・

(3) 新潟港での薩摩見逃しの罰として、新潟上地。

でも大きながめは、それだけ。

1840 川越藩、庄内藩および長岡藩の3藩に対し三方領地替え。
翌年沙汰やみとなったが、取り消しは、これのみ。何か、伏線が
あったのでは。「庄内の反対も大きい、長岡は動かすな」

1843 幕府が長岡藩に新潟町の上知を命じる
幕府は、防衛力強化のため、新潟直轄、長岡藩との強調を選択。
そうすめために、無理に罪状を作ったのかも。
そう考えないと、老中任命はありえない。

1843 10代藩主牧野忠雅が老中に就任 警備人数を増加

1844 幕府の指示により、藩が新潟の五十嵐浜、越前浜などの

1844 藩が城外で軍事訓練を始める

～ 幕府の海外方針にも、深く関与し、対ロシア軍備も先行。
この軍事力が東軍の装備となり、西軍には邪魔だった。

十九世紀の長岡の動向の概略

海外動向、商業勃興、軍備増強、万国公法

(1) 第9代 忠精さんの治世

1766 牧野忠精家督相続

幕府と露・英の対峙

1801 忠精、老中就任、1816-再就任

1806 幕府が若年寄、大目付に蝦夷地見聞を指示 1807 ロシア、択捉幕府軍攻撃

1807 牧野忠精、独自に各藩の対応探究などに藩士2名を東北、北海道に派遣

1808 藩校崇徳館創立される

1808 間宮林蔵が樺太探検

密命、旅日記
でも「密談」。

1825 幕府、異国船打払令を發布

1831 忠精、老中辞任、牧野忠雅家督を相続し、第10代長岡藩主に就任

(2) 第10代忠雅さんの治世

1832 越のむらさき

1842 長谷川酒造

1836 アメリカで『万国公法』発刊

1846 星野本店 と、ぞくぞく創業

1843 幕府が長岡藩に新潟町上知

1840-1842 阿片戦争

1843 忠雅が老中に就任

1856-60 清と英仏、アロー戦争

1857-1858年 対英、インド独立戦争

1844 幕府の指示により、藩が新潟の五十嵐浜、越前浜などの警備人数を増加

1844 藩が城外で軍事訓練を始める

1845 藩主忠雅が幕府老中兼海防掛 1850 虎三郎が藩命で江戸遊学

1853 アメリカ、ペリー浦賀来航

1853 ロシア、樺太を占領したが、同年3月のクリミア戦争勃発を受けて撤退

1853 ロシア、プチャーチンが3隻からなる艦隊を率いて長崎に来航

1854 虎三郎が下田開港反対、神奈川開港を老中牧野忠雅に進言し、帰藩・謹慎

1854 日米・日英・日露(1855Feb)和親条約

1855 鶉殿団次郎、25歳の時、江戸に遊学

1856 長岡藩、安政二年(1856)の財政改革

(3) 第11代忠恭さんの治世

1858 下田・箱館・長崎が開港

1857 牧野忠恭が家督を相続、第11代長岡藩主となる

1857 幕府、講武所内に軍艦教習所開設

1858~1860 河井継之助、江戸・西国遊歴

1862 団次郎、幕臣に、さらに蕃書調所教授

長岡藩の軍政の
動きと武装中立

1863 藩が佐渡警備に藩兵230人を新潟に駐屯

1863 忠恭が老中に就任、外国事務取扱

1861-1865 米、南北戦争

1863 『万国公法』、中国で米人宣教師が漢訳

1864 禁門の変

1865 継之助が財政・軍政など藩政改革に着手 (郡奉行就任、慶応の改革)

1865 『万国公法』、日本で覆刻、長岡の崇徳館に伝わり、藩士の目に・・・

1867 藩主忠恭が第二次長州征討に出兵

1866 薩長同盟の密約(3月)





